

令和6年度第1回西海市総合教育会議 議事録

開催年月日	令和6年7月24日		
開催場所	西海市役所本庁舎3階委員会室		
開会及び閉会	開会 午後2時57分 閉会 午後4時33分		
会議構成員の 氏名及び出欠 の状況	市長	杉澤 泰彦	出席
	教育長	渡邊 久範	出席
	教育委員	北島 淳朗	出席
	教育委員	武宮 智	出席
	教育委員	谷口 久美子	出席
	教育委員	矢吹 希己代	出席
関係職員	教育次長	田口 春樹	
	教育総務課長	岩永 勝彦	
	政策企画課長	山下 幸一	
	政策企画課 政策調整班主査	小方 祐貴	
事務局	総務部長	下田 昭博	
	総務課長	岸下 輝信	
	総務課行政班長	岩永 志保	
付議事件	高校・地域連携イキイキ活性化事業について		

午後2時57分 開会

○総務課長(岸下 輝信)

皆様、お疲れさまでございます。ご案内の定刻よりは若干早うございますが、予定の皆様おそろいですので、ただいまから令和6年度第1回西海市総合教育会議を始めさせていただきたいと思っております。

まずは、開会にあたりまして、杉澤市長より挨拶を申し上げます。市長よろしくお願ひいたします。

○市長(杉澤 泰彦)

皆さんこんにちは。

開会にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

教育委員会の皆様におかれましては、御多用の中、そしてまた今日、長時間に亘りまして、もう前の段階で会議をなされた後でございますが、ご出席を頂きまして誠にありがとうございます。また日頃から、本市の教育振興にご尽力を頂きまして、重ねて感謝申し上げます。そして今回から、新たに谷口委員を迎えての会議ということになっております。

本日の会議であります、「高校・地域連携イキイキ活性化事業について」を協議事項として皆様にご検討頂く予定でございます。

今年度から開始する、高校・地域連携イキイキ活性化事業につきましては、地域の子どもを地域で育てるという機運を、地域と高校が一体となって醸成しまして、地元の県立高等学校が担う役割を地域とともに共有し、魅力ある学校づくりを目指すとともに、生徒の主体性や創造性、実践力を基盤とした教育活動によって、入学者の増加、そして生徒の郷土に対する愛着を高め、地域の人材の還流を生み出すということを目的としているところでございます。

本日はこの事業につきまして説明をさせていただき、そのあと委員の皆様から様々なご意見を頂戴したいと考えております。

また、この議題を通じまして、少子化や過疎化が進む中で、どのようにして地域の教育環境を維持・向上できるかなど、教育行政に関する課題につきましても、様々な視点から議論をしてまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

簡単でございますが、以上をもちまして開会の挨拶とさせていただきます。

本日はよろしくお願ひいたします。

○総務課長(岸下 輝信)

市長、ありがとうございました。

それでは、早速ではございますが議事のほうに移りたいと思っております。

本日は先ほど市長の挨拶にもありましたとおり「高校・地域連携イキイキ活性化事業について」を議題としておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、ここから先の進行につきましては市長のほうにお願ひしたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

○市長(杉澤 泰彦)

それでは、私のほうから後は進行させていただきます。

本日は「高校・地域連携イキイキ活性化事業について」を議題といたします。

当該事業につきましては、今年度から事業が開始されているところでありまふけれども、まずは、事業概要等につきまして政策企画課及び教育総務課から説明し、その後、教育委員の皆様にご意見及びご質問を頂きたいと考えておりますので、よろしくお願ひします。

それでは、政策企画課から説明をお願ひいたします。

○政策企画課長(山下 幸一)

教育委員の皆様には、日頃より教育行政をはじめ、様々な分野で多岐に亘り御支援、御指導を賜っておりますこと、誠にありがとうございます。

本日の議事、「高校・地域連携イキイキ活性化事業」の説明をさせていただきます、政策企画課の山下と申します。また、本日は担当の小方も同席させていただいております。どうぞよろしくお願ひいたします。

これよりは、着座にて説明させていただきます。

さて、西海市高校・地域連携イキイキ活性化事業コンソーシアムにつきましては、先ほどから申しておりますように、本年度立ち上がったばかりでございます。このため、コンソーシアム、共同体で取り組んだ事業はまだなく、本日の説明は、立ち上げに至った経緯及び今後進めていくための方法などになりますが、ご理解いただき、本事業推進にあたってのご助言等を賜ればというふうに思っております。

資料の2ページをお開き願ひします。序章としておりますが、令和4年5月12日でございますけれども、県と市町の連携強化に向けたキックオフ会議、それまでスクラムミーティングとして、知事と県内の首長とで開催されていたものですが、知事の交代により、改めてキックオフ会議として開かれております。

会議では、人口減少対策をテーマとして意見交換が設定され、当時、西彼杵高校の統廃合問題があつていた時期で、県の進め方に疑問を呈する発言を杉澤市長が行っております。抜粋になりますが「人口流出対策として、医療体制、雇用環境、公共交通の充実を主要な取組として政策を進めているが、特に高校の統廃合問題が深刻である。県立高校を存続させるため、入学時の支援金や進学支援を行っている。統廃合は子どもたちの学ぶ機会を狭めると懸念している。県には、長

期的視点で、年度を切らない理解を求める。高校生をしっかりと地元で育てていかなければならない。」

他市町の首長からも関連するような話もありましたが、このキックオフ会議での市長の発言が、これからの取組を創設するきっかけになったものと思っております。

続いて3ページをお願いいたします。本事業については、令和5年度の県高校教育課の新規事業として立ち上がったものですが、先ほどのキックオフ会議をはじめ、県教委の事業構築の背景は、「県内の高校では、離島半島部の学校をはじめ定員を下回る学校が見られ、地域を支える基盤が揺らいでいる。入学者の減少は、生徒はもとより世帯そのものの減少の要因。地域衰退を招く負のスパイラル。中教審の特別部会において設置者は、高校教育が持続的な地域創生の核としての機能を有する意識を持ちつつ、地元自治体等との丁寧な意見交換を通じて、地域における高校の高等学校の教育の在り方に関する検討を行い、高等学校への伴走支援に取り組むことが必要とされており、離島半島部を多く抱える本県においては、全国に先んじて取り組むべき。」との背景のもと、4ページになりますが、県は目標を、「『地域の子供を地域で育てる』機運を地域と高校が一体となって醸成し、地元県立学校が担う役割を地域と共有し、魅力ある学校づくりを目指す。」、

「生徒の主体性や創造性、実践力を基盤とした教育活動により、入学者の増加と生徒の郷土に対する愛着を高め、地域への人材の還流を生み出す。」として、その狙いは、これまで、学校からは講話や商品開発等へのお願い、市町はイベント等への参加依頼など、必要に応じ相談や協力を行う一方向の関係であったものを、市町や学校の考えを共有した上で、安定した協力体制のもと、双方の活動に取り組むこと。また、高校生の自己の可能性や有用性の発見、地元自治体・産業・学校の関係性の向上、地域の大人と高校生の接点を多く生み出し、その結果が進学、就職Uターン促進につながることを狙いとしています。

5ページになりますが、県が市町に示している概要になりますが、ポイントとして、県と市町の役割分担を明確化、県は高校魅力化に係るアドバイザー等を配置、市長は担当窓口を設置しコンソーシアムを運営する。

本事業の対象地域は、担当窓口を設置し、地域おこし協力隊等を採用するとともに魅力化事業の費用負担を行う市町。目指す方向性としては、県教育委員会は社会に開かれた教育課程の実現と高校魅力化、市町は高校を核とした地方地域創生として、共同で高校と地域が連携したコンソーシアムを設置し、魅力化事業を実施しようとするものです。なお、それぞれの高校との単体の共同体ではなく、市町の中にある全ての高校を取り込んだ枠組みとしています。

また、運営主体は市町で、県は主にスタートアップの支援、事業費の負担割合は県と市町で1対1、上限ありで、県の支援は3年間。その後も引き続き設置するようであれば、4年目から市

町の自走となっております。

このような概要が示され、募集の案内があったのが令和4年度の後半でございました。県教委としましては、ぜひとも令和5年度から、西海市に取り組んでいただきたいとの意向でございましたが、6ページをお願いいたします。その時の西海市の状況でございますけれども、①他市に先んじて既に市教育委員会において高校魅力化事業を実施している。資料としては25・26ページに付けておりますけれども、平成29年度からハード・ソフト両面において様々な支援を行っていること。戻って②になります。統廃合の対象であった西彼杵高校に九州文化学園からのバレー部員の転校が決まりつつあり、西彼杵高校が統廃合の危機から抜け出すことが見えてきたこと。その反面、市内の中学校から市内の高校への入学者は、令和3年度191人中66人で34.6%、令和4年度は183人中55人で30%と低いこと。また、④一次産業の後継者、新規就業者が著しく減少していること、及び市内企業が市内高校に求める求人数に達していないこと。多くの事業所で労働者、人材不足が生じていることなどがございました。

これを踏まえて、応募の検討に入るところでしたが、まずは現場となる高校の理解が先でございましたので、各高校に意向を確認しております。その結果、各学校とも目的などは理解できるが、教員のマンパワーが不足しているところに新たな事業を直ちにスタートさせることは難しいとのことで、令和5年度の募集については見送ったところですが、本事業につきましては、令和6年度から8年度を対象とする第2グループの募集も示されておりましたので、次期に向けてさらに検討協議を重ねることといたしました。

7ページをお願いいたします。検討協議の前提として二つ、一つ目は、本事業の主担当は市長部局が受け持つ。二つ目は、西海市教育委員会が所管している「西海市内高等学校魅力向上支援事業」は、引き続き教育委員会で実施する。

今まで行っている高校魅力化の事業の取組を本事業に置き換えるのではなく、さらに地域や地元企業、そして行政が関わり協働できる取組とすべきとして、8ページをお願いいたします。目指す方向性・役割案として、①市内の子供は市内三つの高等学校の魅力を理解し、それぞれの進む将来に照らし合わせ、進路を選択できるものとする。②市内の学校は、ふるさとの資源や学校の特色を生かした魅力ある学びによる人づくりに努め、将来のふるさとを担う児童生徒の育成を目指す。③市内の産業を担う大人は、受け継がれてきたふるさとの資源をしっかりと後世へ引き継ぐため、その情報を子どもに分かりやすく伝える。④地域は市内の学校と連携し、地域活性化に努める。以上を目指すべき方向性、政策企画課を担当課として、昨年度から準備に入りました。

9ページをお願いいたします。まずもって、お盆明けですけれども、市長が各学校を訪問し、思いとお願いを伝え、全ての高校において令和6年度から取り組むことに賛同いただいたところで。その後、県高校教育課、県がアドバイザーとして委託していた十八親和銀行、それに市教委

と政策企画課で準備会を設置し、3回の全体会で規約等の作成、コンソーシアムに入っていた多くメンバーの人選とその交渉に入り、10ページになりますが、晴れて本年5月27日に設立会が開催でき、本市の事業については、名称を「西海市高校・地域連携イキイキ活性化事業コンソーシアム」、目的を「コンソーシアムは、西海市内の長崎県立大崎高等学校、長崎県立西彼杵高等学校及び長崎県立西彼農高高等学校と、西海市立小中学校、地域、企業並びに行政等の多様な関係者が主体的・創造的な対応を行いながら、地域の子どもを地域で育てる機運を醸成するとともに、持続可能な学校や地域づくり及び地方創生に寄与することを目的とする。」次のページに入りまして、目指す方向性・役割として、準備会で案としていた4項目をブラッシュアップ及び「⑤高校生は主体的に地域で活動し、地域はその活動を支援する」を追加しております。

12ページには、目的を達成するための共同で行う事業として、キャリア教育の推進、情報発信の充実、学校と地域の連携・協働の強化、コンソーシアムの持続化や教育の成果を地域の活力創出に還元する仕組みづくり、及び地域と連携した探求的な学びに関することといたしました。

13ページ、組織としては、コンソーシアムの委員を県学校関係、地域企業等、行政区長として、これにアドバイザーを加え、右の名簿の皆様に努めていただいております。また、事務局には市役所内の関係部局を入れております。企業等の委員につきましては、それぞれの団体からの推薦でございましたが、集まった皆様を見たとき、それぞれの企業団体から本会にかける意気込みが伝わってきておるところでございます。ただし、今回、女性の方が含まれていないことに事務局として大変反省をいたしております。なお、会長を市長、副会長に教育長と西彼杵高校の校長先生、参考までですが、西彼杵の高比良校長先生は、令和4年度まで県高校教育課に在籍しており、本事業の創設を担当されておられたとのこと。また、大崎高校及び西彼農高の校長先生に監事に就任頂き、この会長、副会長、幹事をもって役員会を組織することとしております。

続きまして、14ページをお願いします。協議の進め方ですが、まず、学校ごとの企画運営を行う機関として、それぞれに専門部会を立ち上げました。組織は各学校で決定し、大崎高校は、コンソーシアムの委員のうち、大崎地区に関わる方に、

大島こども園、大崎小、大崎中及び高校の運営員等を加えた21名で構成。西彼杵高校は、令和5年度まで設置していた西彼杵高等学校活性化協議会のメンバーを主に、長崎大学や市バレーボール協会を入れた14名、西彼農高は高校の先生方を中心に地域をよく知る同窓会や育友会の9名、協議内容に応じて、同窓会等を通じてスポット的に地域の方々に入ってもらおう方法をとっています。また、3校共通した配置として、アドバイザーの地域商社クリエイティブカンパニー、県高校教育課、市教育総務課、西海市政策企画課を入れていただいております。

この専門部と別に、全体事業の企画運営、予算調整等を行う機関として調整会議を設置いたします。メンバーは、高校アドバイザー、県教委、事務局で構成いたします。

四つの機関が連携し、例えばコンソーシアムで出た意見を下ろしての協議や、専門部会からのボトムアップ的事業提案など、双方向の協議により、幅広く意見を集約、検討してまいります。

次に15ページ、年次計画でございますが、コンソーシアムは年3回程度、専門部会及び調整会議はコンソーシアムの前後に適宜開くこととしまして、1年目となる本年度は、目標の共有や、本年度及び来年度の事業計画を検討・準備する年として、2年目となる令和7年度は、事業の実施及び取組内容の情報発信、3年目の令和8年度は、引き続き事業を実施、検証しながら、自走に向けての協議に努め、令和9年度から自走事業を継続する進め方と計画しております。

それで何をしていくかというところでございますが、16ページになりますけれども、それぞれの視点から想定される提案、事務局の想像で列記しておりますが、是非ともただ単なる一方向の学校支援、地域行事への参加とならない高校の魅力化につながる提案ができるよう、そのためには、コンソーシアムや専門部会での情報収集、生徒や企業へのアンケート調査、広報紙やSNS等での情報発信などを実施して、ニーズと課題の把握、そして活発な意見交換と共同での事業推進に努めてまいります次第でございます。

説明のまとめになりますけれども、本事業につきましては、スタートしたばかりでございます。本コンソーシアムへ賛同していただいた方々は情熱を持った方ばかりで、様々な視点から幅広いアイデアと協力を頂けるものと思っております。

地域の子どもを地域で育てる共通の目標を持って多くの方が関わり、様々な取組が展開されることで、地域愛に満ちた若者を育むことにつながり、地域への人材の還流を生み出すものと思っております。

以上で説明を終わりますが、最後に、設立会議時の市長の挨拶をご紹介します。18ページをご覧ください。抜粋になりますが、「このすばらしい西海市を次世代に継承していくためには、子どもたちがこの地域を愛し、その魅力を理解し、そしてそれを守り育てていくことが不可欠です。ふるさとの歴史を学び、文化を体験し、地域社会に積極的に参加することから、地域愛は育まれます。地域愛を持つことで、子供たちは自分たちのアイデンティティを深く理解し、地域への帰属性の大切さを認識して、それぞれが生きていく社会の中で、自信を持って未来を切り開いていく力を身につけることができると思っています。これまで西海市としても、高校生やその保護者、高等学校への支援には、できる限り努めてきたところですが、高校教育の中の地域教育については、小中学校の義務教育とは違って、高校へお任せして頼り切っている状況でした。本日をスタートとして、お集まりの皆様から忌憚のないご意見を頂戴し、それをもとに活動を行ってまいります。高等学校には、生徒たちが地域で活動できる仕組みや、誇りを持つような教育を奨励し、実際に地域社会と関わる機会を、企業等の皆様には、教育プログラムへの支援や、生徒たちが実際の職場体験を通して地場産業を学び、地域社会の一員としての責任感

を育てる機会を、地域には、生徒たちがそれぞれの未来に向かって進む主体的な活動に対し、見守りサポートを担っていただきたいと願っています。地域の皆様と地域の子どもを地域で育てる機運を醸成することが、持続可能な学校や西海市づくりに寄与するものと思っております。地域愛に満ちた若者を育て、西海市を彼らとともに未来へとつなげていく、この目標に向かって、皆様のご理解とご協力と熱意をどうぞよろしくお願いいたします。」

以上になりますけれども、政策企画課からの説明といたします。

○市長(杉澤 泰彦)

次に教育総務課から説明をお願いしたいと思います。

○教育総務課長(岩永 勝彦)

教育総務課からの説明ですが、教育総務課資料ということで、参考までに各高等学校の生徒数の推移等の説明をさせていただきたいと思っております。

1 ページ目をご覧くださいと思います。市内の高等学校の生徒数、毎年5月1日現在の生徒数になりますが、大崎高校は、令和元年度に全体で115人の生徒が在籍しておりましたが、本年度、令和6年度は102名ということで11.3%減。西彼杵高校につきましては、150人が95人、36.7%減。西彼農高は223名が163名、22.9%減、市内3校で488名の在籍が362名ということで、26.2%の減というような形で生徒数が減ってきている状況にあります。

続きまして2ページ目です。市内の高等学校に入学した生徒の出身内訳をこちらのほうにお示しをしておりますが、大崎高校につきましては、市内の中学校から毎年度約半数の生徒が入学をしているような状況になっております。そのほか、市外からの入学者につきましては、全員野球部員という形になっております。

西彼杵高校につきましては、約60%程度が市内の中学校から進学をしている状況です。市外からが40%弱ということで、5年度6年度についての市外は、長崎市以外はほとんどバレー部の生徒ということになっております。

西彼農高につきましては、令和5年度が若干市内の中学校の生徒の進学率が下がっておりますが、大体40%強が市内の中学校から生徒が進学をしている状況です。農業高校という専門校になりますので、長崎市内、佐世保市内、時津・長与から多く進学をしているような状況になっております。3ページ目ですが、これは先ほどの資料と重複をするところがありますけれども、市内中学校の卒業者の進路状況をここにお示しをしているところです。

それから、4ページ目、5ページ目ですが、中学校の生徒が進学をする場合に、まず、考えるところということで部活動がありますので、市内の高等学校にある部活動の部員数を4ページ目に、それから5ページ目に、市内の中学校の部活動の加入状況をお示ししておりますが、なかなか市内の中学校の部活動と高等学校の部活動が連携をしているような状況になくて、どうしても

部活動で市外の高校に進学をする生徒さんが増えている状況ではないかなと思っております。

それから、6ページ目につきましては、教育委員会で市内の高等学校魅力向上支援事業ということで、各学校の取組状況の実績を載せているところです。これは後ほどご覧頂ければと思います。

教育総務課からは、以上です。

○市長(杉澤 泰彦)

ただいま説明が終わりましたが、これから皆様方からのご質問またご意見等を伺いたいと思いますが、何かございませんでしょうか。北島委員。

○教育委員(北島 淳朗)

北島です。ご説明ありがとうございました。今日のこの総合教育会議がどういう協議の場になるのかなというふうに思っておりましたけれども、ずっと温めてこられたというか、しっかりと準備をされながら今年度覚悟を持ってスタートを切られたと。この事業の意気込みを感じさせるご説明を頂いたと思いますし、発端が杉澤市長だったということですので、非常に地域の者として、また関係者としても大変ありがたいなあというふうに思ったところです。

もともと大崎高校にしても、西彼杵高校にしても、実は西海市以外の高校でもそういった可能性っていうのはたくさんあるんでしょうけども、それをしっかりと捉まえてきたということも含めて、やはり当局の皆様の積極的な動きというのがここに至ってと思いますけれども、それ以上にやはり厳しい未来もあって、今動かないとということだと思います。

具体的な話もあるにはあるんですが、まず、総論的な部分で少し、私自身の福祉という領域から、これまでの知見を少し、情報提供としてお伝えできればなと思っております。若干大きな話にはなるんですが、西海市に十分共通するところもあるかなと思っておりますね。

皆様もご存じのとおり、福祉の先進国ということで北欧が言われてます。特にデンマークは世界一幸せな国ということで、こちら毎年OECDの幸福度ランキングとかああいうことで発表されますが、かなり上位、2位とかそういったところですね。一方、日本は50位とかそのレベル、何がそうさせてるんだろうっていうね。実際住んで、我々はその生活の中で、不幸せだなと感じることはあんまりないと思うんですが、やはり国際的に見ると、様々な生活の仕方が違っていると。国家のシステムが違うということですね。我々は福祉を勉強するにあたって、やっぱりデンマークが1番優れているのは、やはり高負担高福祉なんですよ。もう徹底して、ご存じのとおり税金めちゃくちゃ高いです。消費税にしても、所得税にしても。だけど、しっかり教育費も無料、医療費も無料、福祉にかかる費用も全て無料という、しっかりと民主主義の中で国家システムがつくられているということです。

高齢者福祉にしても障害者福祉にしてもそうなんですが、それらを学んでいくとどこに行き当

たるかっていうと、やっぱり教育なんですね。社会福祉学者の皆さんが言われるのは、もう必ずやはり教育のことを言われます。結局その国としてこういう仕組み、つまり、お給料が高い方で税金をたくさん払ってらっしゃる方がいらっしゃるわけですけど、逆にそこその所得なんだけど、それなりに税金を払っている、税金を払う額は物凄く違うんだけど、だけどそれが還元されて社会の中で使われていくことに対して、誰ひとり不平不満言わないと。誰ひとりっていうのはないかもしれませんが、それが社会の中で当たり前になってるっていうことは、やっぱり教育にあるんだということを皆さん言われるわけですね。どういう教育かっていうと、やはり義務教育の段階から連帯とか協働とか、そういった、つまり競争原理とは違うところで私たちは社会に関わっているっていうところを、非常にそれぞれの自主的な学びの場をつくることによって、それを分らせていくという、自然の中で。これは、実際こう見ていくと、西彼杵高校でもやられてる学びの共同体に非常に近いところがあったりするんですね。学校には実際教壇がないらしくて、常にフラット、児童生徒の皆さんとフラットな位置で、先生というよりもコーディネーターというタイプの先生が常に子どもたちと一緒にディスカッションをしていくといったようなことが、本当に一般的に日常で繰り返されてるそうです。その上で、中学校になると、これはデンマークに限らずですけども、中学生ぐらいになると、ここにもありますが物凄くキャリアに対する意識っていうのをそこで、自分はこうなりたいっていうのははっきりしてるらしいですね。もう既に。今50%ぐらいが日本は大学進学ですし、80%、90%が高校進学でしょうかね。ところが、デンマークは全員高校に行くわけじゃなくて、そこで自分がなりたい職業の職業訓練校に行くか、自分がなりたいものになるために高校大学と進むかという選択をそこでするらしいんですけども、至ってそれが、いきなり決めるわけじゃないですから、そういった義務教育の中で培われてきた自分自身のキャリア感ですとか、人生感とかいったようなことで選んでいくということで、もう中学校ぐらいのときから物凄い自立性を持つてるわけですよ、どう生きていくかという。だからそのことと、今日教育委員会の中で教育長がご出席されたという産業教育という、日本においても、そういった地域における産業を支えていく人材をつかって育てていくんだという、そういったお話も少し重なったりしながら、今後については、やっぱり自分たちで自分たちの人生を考えていけるような教育に本当にしていけないといけないんじゃないかなと。いきなり国のシステムを変えるというわけにはなかなかいかないんでしょうけども、少なくとも今、特に四国がすごいですね、今治ですとか、徳島のほうで高専が新しくできたりとか、それから、サッカーの岡田監督が学校長になられて、人材を、いわゆる人を育てるんだと本当にそういったことを言われてますが、そういう何か日本の中でもできることを特化してできること、例えば今、スポーツでやられてますが、もう一つは徹底して学びの共同体ができるような、それから本当にそこから職業、今西彼農高さんにうちも授業に行かせていただいたりとかしてるんですが、西彼

農高さん非常に人気が高くなってきてるっていう話を聞くんですけども、やっぱりそこは、そこに行けばこうなれるんだっていうものがあるからだと思うんですね。そういうふうにか、ぜひコンソーシアムの中で、際立つもの、コンセプトをしっかりと作っていただいて、そこに向かってみんなが協力し合う、地域も協力し合うというような形でやっていただくと、すごくいろんな形の、試行錯誤になるかもしれませんが、捉えができるんじゃないかなというふうに私自身も希望をいただいたような感じでした。すみません、そういったことでよろしくお願ひします。

○市長(杉澤 泰彦)

今、北島委員が言われる中でそうだなと思うのは、やはりキャリアに対する意識です。これは、子どもたちが、当然それを持つのが早い段階からということが一番大切なんでしょうけども、やはり地域の中にどういふ企業があつてどういふことをやってるのかと。それをやっぱり子どもたちに、今まで本当に情報を与えていたかというのが一つ問題あるんですね。そういう中で今回は企業さんもしっかり中に入りまして、特に大島造船所さんなんかは、これから人が足りなくなるというのはもうこれは分かつてます。ダイヤソルトさんにしても、やはりこれから人を雇用していくということが非常に難しくなってくる。これはもう日本全体の傾向なんですけど、この中でもいち早く、これはやっぱり企業が本気を出してこれに取り組んでいく、それをしっかりと高校もそういう地域も、その流れの中にしっかりと枠を決めてやっていくということが非常に大切になってくるんじゃないかなというふうに思っております。

教育委員会の資料の中をご覧になつてもお分りになつたと思うんですが、地元の中学生在が市外に出ている、これの割合が高いんですね。これは部活がないからということとは意外と大きな理由になつているようですけども、実は地元のことをよく知らないんじゃないかなということもちょっと考えられるんじゃないかなと思うんですね。だから、そういうところを、やはり私たちもしっかりとこの地域にはこういうものがあつて、そして、文化も含めてすばらしいものはいくらかもあるんだということもしっかりと伝えていかなければならない。企業も、自分たちでやってる事業に対して誇りを持って、もう世界の最先端行つてるんだということ、本当最先端を行つているんですよ。そういうのを知らないっていうところにも問題があるんじゃないかなと思つて、今回のこういう取組をやつてみたところでございますが、企業さんのほうがしっかり、これに対して非常に協力的であるということに対しても非常に感謝しているところでありまして、これはもう何とか成功させて形をつくつていきたいというふうに思っております。

何かほかにか何か気づいたこととかご意見等があれば頂きたいと思いますが、何かございませんでしょうか。

矢口委員。

○教育委員(矢口 希己代)

ご説明ありがとうございました。私も、市長さんがおっしゃるように、そういう企業の方たちのお話とかを子どもたちにもっと知って、子どもたちが西海市の中にどういった企業があって、どういうことをされて、最先端のことをされているのかっていうのもっともっと知る場を増やしていただけたら、子どもたちもそこに興味を持って目が向くんじゃないかなっていうふうに思いました。今日の弁論大会でも、子どもたちの中から地域っていう言葉をたくさん聞きました。だから、本当に子どもたちは、この地域の方たちに支えられて、いろんなことを学んでいると私は感じて午前中は話を聞いたところでした。なので、こういったこの高校なんかも、私も1人の保護者として思うことが、その資格とかを取れるような、そういったのがあるといいなっていうふうに、専門的なことはちょっと分かりませんが、何かこう、やっぱり親としては、子どもに資格を何か持たせたいっていうのが正直ありまして、そういった、例えば、近くにバイオパークさんとかもありますので、そういう動物に関係するような資格が取れたりとか、他の高校とはちょっと違う魅力的な資格が取れたりするといいなあとというふうに、単純に思ってしまうんですけども。なので、親としてちょっと思うところでありまして。

ちょっと一つお尋ねなんですけど、このアドバイザーっていうふうに、この資料の5ページのところに高校魅力化に係るアドバイザー等を配置っていうふうになってるんですけど、このアドバイザーの方はどういった方でしょうか。ちょっと説明していただければと思います。

○政策企画課長(山下 幸一)

まず、アドバイザーの分になりますけども、県が書いている5ページの概要のところは、県が十八親和銀行を昨年度までアドバイザーとして入れておりました。十八親和銀行が、子ども向けの起業を目指す取組とか、そういった企業、アントレプレナーシップ講座とかを結構高校等含めて、小・中学校含めてしてるもので、そういったこともあって、県が十八親和銀行をアドバイザーとして入れておりますけども、西海市については、名簿の13ページになりますけども、13ページの右側に30番、31番という形で、同じく十八親和銀行と西海市の地域商社、クリエイティブカンパニーをアドバイザーという形で入れております。ここにつきましては全体的なコンソーシアムでのアドバイザーとしてだけではなくて、各学校の専門部会にも入っていただいて、幅広い意見を頂くという形にしております。最初の部分について、私が言うのがあれかなと思うんですけども…。

○教育総務課長(岩永 勝彦)

資格の件に関してなんですけども、一応教育委員会のほうの補助事業で、各学校で英語検定、電卓簿記、情報処理、漢字検定、ビジネス文書検定といった資格取得に係る費用の2分の1を市のほうが補助しております。あと西彼農業高校についてはやっぱり農業高校ということで、フラワー装飾であったり家庭科の技術検定、洋服、和服は食物とか、家庭看護とか保育検定とか、そ

ういうふうな資格取得も行っているんですが、そういうものの受験料の2分の1を市のほうで負担をさせていただいております。

○市長(杉澤 泰彦)

それから、アドバイザーの十八親和銀行の頭取が自ら学校に出向いて、金融に関する講義をやったり、非常にやっぱり子どもたちがそれに興味を持つんですよ。お金がどのように動いているのかとかいうね。それとかSCC、クリエイティブカンパニーですね、彼らがやってるAIとか、そういうものに対して子どもたちが物凄く興味を示しているというのはあるということで、ちょっとそれで知っているところがあれば。

○政策企画課長(山下 幸一)

今年も高校生とか小学校、中学校を対象にして、地方創生の分で西海クリエイティブカンパニーが受委託者となりまして、講座をやっていますが、昨年度はこういった講座での取組を通じて、受講生の中から、クリエイティブカンパニーの事業としてですけれども、台湾のほうに、多分6名ぐらい地元の高校生を連れて行っていただいて、そこで台湾の学生の生の学校と一緒に行かせていただいてというところで意見交換をしてきたということで、社会貢献とかそういったことに就かなくてはならない、しなくてはならないというところをかなり感じて帰ってきていたような形で思っております。

○市長(杉澤 泰彦)

谷口委員。

○教育委員(谷口 久美子)

ありがとうございます。前も聞いたと思うのですが、コンソーシアムっていうのは意味としてはどんなことだったですかね。

○政策企画課長(山下 幸一)

はい。私もこれで学びましたけど、共同体という形です。

○教育委員(谷口 久美子)

ありがとうございます。以前からもそういうお話もあつたので、逆に言えばありがたいことに市が取り組んでくださるんだなってことは思っておりました。私の現職のときから、学校に勤めていたときからのことを考えると、今、各小学校中学校ともに、ふるさと教育というのは自分のふるさとを知るだけではなくて、今後未来、どんなふうになって、大きな課題も、人口減っていくとか、働き場所がないということも課題として踏まえながら、じゃあどんなふうにしていけばいいのかというのを少しやっぱりキャリア教育の充実と含めて、今、各小学校の段階また中学校についてやっているというふうに思っています、小学校、中学校ではですね。その中で、特に中学校3年生になっていよいよ高校進学というときには、各中学校でも、市内の高校に限らず、

進学先と想定される学校との連携、そしてまた学校にわざわざ高校のほうからおいでくださって学校紹介などもして頂きながら、それを子どもたちはしっかりと聞き、そして自分の進路選択につなげていくことを各中学校やってきております。その中で、自分がどの高校に行くのかということは、もう本当自立した自分の責任で、もちろん学校の先生や親御さんのいろんなアドバイスを受けながら、最終決定は自分だよということをお話しながら、進路選択、進路決定しているのが現状でありますので、市内の高校を選ぶのか、また、それ以外の市外の学校に行くのかというのは、本当にもうそれぞれの自分のキャリアを想定した上で選ぶので、そこを市内に限定するということはもちろんしてはいけなかったということがあります。

一方では、今回の大崎高校さんとか西彼杵高校さんとか、部活動の競技ということをもとに、逆に言えば、市外からの生徒さんがたくさん来て、そしてそこに、西海市で生活をして学んでいて3年間をともに過ごすということが、ただ部活動で選んできたってことではなくて、部活動を通して西海市のよさとかっていうのを考えて、その子たちにとってみれば西海市が第2のふるさとになってもらえれば今後の生き方につながっていく、そういうふうな時間になるのかなあというふうに考えています。

今、私はまちづくりに取り組んでいるんですけど、どこの町もそうですが、もともとの住民が本当に高齢化して自然減もあるし、また、若者が仕事がないとかいうことで市外に転出する方が多いんですけど、その一方では、わざわざこの西海市が好きでとか、西海市に住みたいっていうふうにしてきてくださる移住している方々も実際はいます。その方々に何で、特に私のとこ横瀬ですけど、何で横瀬に来たんですかっていうと、とにかく横瀬に住みたいでとか、この環境あるとか人々のつながりとかそういうのが好きで選んできたという、そういうのがとても、私たち元々の地元の住民以上にまちのことを愛して下さってるというのを聞いて、そういうふうなことで考えていくと、今からどんどん減っていく人口を出ていくからっていう嘆くのではなくて、出て行く子どもたちには他のところでしっかりと自分の力を伸ばして活躍して、あるいは生活していく力もつけて欲しいし、逆に、西海市に来て西海市で学びたいという子たち、そしてその子たちにとって第2のふるさとになる、そういうふうな取組をこの高校の中でもやっていければ、そしてそれが市内の企業さんとかとつながって、そこで働く場所もあって、移住をしてというふうに、定住もしてというふうになっていくと、とてもまちが明るくなるのかなというふうに思っております。

ですから、そういうことも考えると、このコンソーシアム、この事業というのを大変期待を持ちながら、一緒にやっていければいいなというふうに期待も持ちながらお話を聞かせていただきました。

以上です。

○市長(杉澤 泰彦)

ありがとうございます。

最初にふるさと教育というのが出ましたけれども、先生が言われるように、ふるさと教育というのはその土地残ってるその伝統文化の継承ということばかりでなくて、やはり、これからこの地域はどうなるんだろうかというところ、ふるさとを今度は問題意識としてこれを持っていくという、そういうことがこれから本当必要なのかなと思います。

そういう中で、ふるさと教育をもっともっとこう深掘りしていって、そしてやっぱりどういう課題があるのか、その課題解決のために、子どもたちが何ができるのかというところまでの、そういう教育というのが、ふるさと教育は本当に必要じゃないかなというふうに感じたところがあります。それから、人口が減っていくというのは、これはどうしようもない、止めることはできない。子供の数も減っていく、もともともう小さくなってきているんですね。その中で、先生もおっしゃられてましたけども、外から呼び込むということも、これは考えていっていいんじゃないかなと。当然それは自治体間の取り合いということにもつながることはつながるんですが、でもそれもいいのかと、ありかなということも考えていくべきかなと。

そういう中で、西海市のいいところを分かっていたら、先でまた西海市のほうで定住してくれるというような、そういう下地になれば、またそれはそれで本当に人材確保につながっていくのかなというふうに思ったところがあります。

本当矢吹委員から出ました資格に関しても、普段考えられる資格って大体ありますよね。それとは別に、この地域だったらこういう資格があれば子どもたちが喜ぶよねっていうような、そういうものもどんどん見つけていくということも大切じゃないかなというふうに思いましたので、そういうところを教育委員会もいろいろ研究していただければなというふうに思っております。

ほかに何かございませんか。

武宮委員。

○教育委員(武宮 智)

失礼します。今たまたま私の息子が西彼杵高校の3年生ということもありまして、今、育英会という会の役もさせていただいているということもあって、このコンソーシアムの会議と、それから、つい先日7月9日に西彼杵高校の学校運営協議会が立ち上がって、そのような場にも参加をさせていただいて、思うところを少し述べさせていただきたいと思うんですが、家で息子に、今こういう会議に参加していて、ここを選ぶときにどういうふうに高校を盛り上げていけば、子どもたちがこの高校を選択したいと思うかっていうような話をしたんですね。子供たちが学校を選ぶ、1番目に出てきたのは偏差値だということですね。偏差値がもうちょっと高ければ行く子が増えるというようなことを言いました。もう一つは部活動がやりたいことがないというところが

引っかかる。そうすると、どうしても市内の高校に対するイメージが、学力もそれほど高くなく、部活動でやりたい、目指したいところもない子が行くような学校というイメージがどうしてもついてしまっているというのが大きな問題だと思っています。

現に今、自分の運営してる学童保育に来ている小学生でさえ、市内の高校には行きたくないようなことを子どもたちが言うんですね。ということはつまり、親の世代がやっぱりそういうことを常日頃、言ったり見たり聞いたりしてるんだなっていうことを思って、そういう親の意識っていうのが子どもたちに少なからずとも影響を与えているというのがあるなということを思っています。その高校に行く数も減る、そうするとまた部活動もできなくなるというこの負のスパイラルの中にあって、そのイメージをどうやって打破していくかっていうのが、特に市内の中学校からの市内の高校への進学率を上げるには、非常に大事になってくるかと思います。

実際入ってみると、西彼杵高校も学びの共同体っていう、非常にこれは先生がついて、その子どもたちも自分たちで考えて学べる、うちの息子にしてみれば非常にやりやすい学習の方法だったということで聞いてまして、実際にイメージしているものと入ってみてからの学校生活の楽しさ、ここは違うということを言っていたので、ということは、つまり今ある学校の魅力っていうのがうまく伝えられてないと思うんですね。だから、その今既に持っている学校の、先ほど資格等のこともそうですけど、それをまずは認知してもらえようような努力をするっていうのが、いちばん今できる最良の方法かなっていうことを思いますし、また、そのようなことをしながら、学校の理念とか、あるいは魅力化っていうのもっともっとこう進めていって、それをまたさらに発信していくという、そういう流れが作ればいいかなということを今の時点で私としては思っております。

以上です。

○市長(杉澤 泰彦)

今、武宮委員のほうから問題提起を頂いたと思うんですね。一つは親世代がその意識というのが、これは、西彼農高も、実は通っていた世代の方々があんまり熱心でないというのはちょっとありますよね。そういう中で、本当に今やろうとしていることをどれだけ本当認知していただけるかということが、本当に非常に大切になってくるかなと思います。そういう中で、このコンソーシアム、これからどうやっていけばこのコンソーシアムが、もっとうまく動き始めるかというような、そういうアドバイスとか何かあれば頂ければというのがございますけど。

北島委員

○教育委員(北島 淳朗)

ありますと言いながら、もう皆さん既にお考えなんでしょうけども、たぶん、高校活性化については島根県の隠岐島の魅力化の事業を研究されていらっしゃると思います。もともとは、ソニ

一にいらっしゃた岩本さんという方が、単純に東京で企業に勤めながら、たまたまご縁があった隠岐島に魅力を感じて辞めてしまって、そこからスタートだったんです。20年ぐらい前だったかな、長崎にも来て私と一晩一緒にわーわーやってたこともありましたが、そこでやったのが、それこそ存続が難しいぐらいまで落ち込んだものを、一気にそこからいろんな方のお力をお借りしながら、本当にそこに通いたいといったような高校、1校しかないそうなので、各島の皆さんがその高校に通うらしいんですが、その高校に、島外に出るのではなくてそこに通い始めたということで、結局3倍ぐらいになったんですかね、人数が。そういった事業をやられた方です。

私、随分前の話なんで聞いたところでは、ソニーいらっしゃったもんですから、徹底してそういったネットワークを生かして島から東大で授業を受けるんじゃなくて授業をする、高校生がですね。それからソニーの関係から一流企業の皆さんが、今でいうとネットでできたのかどうかかわかんないですけど、ネットでやったような形で遠隔で授業をすとか、いろんなことをされたそうです。やっぱりそこで、島だから学べないではなくて、ここだから学べるっていうところをどんどんやっていったそうなんですよね。この13ページのコンソーシアムのメンバーを拝見したときに、まずはクリエイティブカンパニーの皆さんが入っていらっしゃってよかったなあと思いました。やっぱり彼らは本当に自由な発想で、この間もオードリー・タンさんの、海外からの中継も実現させたりとか、もう本当に何か奇跡的だったらしいですけどね。本当、そういったネットワークも持っておられるし新しい発想もあるでしょうから、存分に彼らの発想を生かしてもらいたいと思うのと同時に、先ほどのソニーのケースじゃないんですが、西海市も全国、世界で活躍されていらっしゃる方たくさんいらっしゃると思うんですね。是非そういった皆さんに、このメンバーに、オブザーバーなのかサポーターなのかになっていただいて、西海市外からエールをというか、実際、現実的な関わりを持っていただければ、応援をしていただきたいなというふうにちよっと感じたところです。

すみません、アドバイスにはなりません、ぜひちょっと参考にとお思います。

○市長(杉澤 泰彦)

そうですね、ここから学べるということ、これを西海市もしっかりと探し出して、その一つとして活躍されている西海市出身の方、探せば結構いるんじゃない。思い当たる人何人が挙げることできんね。

○政策企画課長(山下 幸一)

半年ぐらい前ですかね、弁護士会かなんかの女性初の会長さんが西海市の方っていう話は。

○総務課長(岸下 輝信)

出身者の著名人の方、ウィキペディアのほうで今ちょっと検索してみたんですけど、先ほどの日弁連の会長さん、淵上玲子さんですね。その他ですと、そうですね、元乃木坂の川後さんとか

ですね。もちろん歴史上の人物で中浦ジュリアンも載っておりますね。

(「野田秀樹さんとかも」の声あり)

演出家ですね、そうですね、載っていらっしやいますね。

○教育委員(北島 淳朗)

野田秀樹さんがどうかわかんないんですけども、平田オリザさんという方がいらっしやって、演出家なんですけども、今大阪大学のコミュニケーションセンターのセンター長をされてて、演劇からコミュニケーションを学ぶってことをやられてるんですね。だから本当に野田さんをお願いして、本当にここで、何か劇というものをモチーフにしながら、テーマにしながら、何かひとつ、エッジの立ったもので活動できないですかね。素晴らしい人ですよ、野田さん自体がね。

うちというかその介護業界、福祉業界もう本当に人材不足でどうするかって、今皆さんが勉強しているのがZ世代に対してなんです。Z世代の方がどういう職場で働きたいとかですかね、どういうものを職場に求めるかみたいな、そういう勉強をしてるんですけども、考えてみたら、またさらに若い世代ですよ。今、α世代って言われている、2010年生まれぐらいからということなんですけども、本当に5年、10年でたぶん社会自体が物凄く変わるじゃないですか。まずはAIですよ、様々にDXも行われている中で、社会自体がどんどん今もうまさに変わっていつて。というところで、国として学習指導要領というか、そこで生きる人を育てるわけですから、教育の在り方も当然、今と10年後で絶対違わないといけない。逆に言えば、AIができる仕事は、人がそれになるために学ぶこと自体がなくなっていくわけなんで、AIを使うとか、人でしかできない仕事っていうものを何か想像することも含めて、高めていくかっていうことになってくると思うんですが、そういう意味では、今から小学校、中学校も一緒なんでしょうけど、高校に向けて、未来に向けた人を育てるっていうのはどの程度を国のほうは考えてるんですかね。

○教育長(渡邊 久範)

ちょっと難しい質問で、国の動きをよく把握してないんですけども、今言われたように、AIが我々の身近にも普及してきて、もう我々も使えるようになりましたけれども、よく、AIによって今の仕事の半分以上は将来なくなると言われてますけれども、特に、逆に残る仕事というのが、やっぱり人間関係、学校の先生もそうなんですけど、単純にもしかして知識だけを教えるのであればAIのほうが、AIドリルというのがありますし得意かもしれませんけども、やっぱり生きてる人間にいろんな失敗したり、アドバイスしたりとか、そういうことはAIには無理ですよ。そういう、人間関係の仕事というのは残っていくだろうと言われてるんですけども、今、国のほうが大きく舵を切ったなというのは、今までの勉強、いわゆる教科書の勉強というのが暗記とかそういうのが知識中心で行ってたんですけども、最近、総合学習の中にも課題研究という

ことで、いろんな課題を研究、大学でやってるような研究をするように、これはもう高校もそうですけど、小学校、中学校でも総合学習の中で課題研究をするというふうになってるんですけども、課題研究というのは、あるテーマを決めて、例えば西海市の空き家問題、これを解決するにはどうしたらいいだろうかと、我々行政も大人も悩んでるんですけども、こういったことを子どもたちがネットで調べたり、あるいは市役所に聞きに行ったりとかですね、そういうことをしながら、解決には至らないにしてもそれをやることで、こういう問題が今起こって大変なんだなというのは分かって、そういうのは、学校の中に入ってきているんですよ。

私は校長してたときに、今から20年ぐらい前に、京都市立堀川高校というところは、堀川の奇跡って有名なんですけれども、今はもう超進学校になったんですけど、その頃までは全然進学も駄目で、もう鳴かず飛ばずの状態だったんですけども、荒瀬克己さんという、今、中教審の会長をされてるんでしょうけど、その人が教頭に来て、まさに課題研究を始めて、京都市内には大学がたくさんあるんですね、そこに子どもたちを派遣していろんな研究をさせる。そういうことで、子どもたちが自分で勉強する。この子たちはもう勉強の仕方を知ってますから、大学に行くと「堀川の子どもたちはもう手順が違う」って褒められたんですよ。そういうのがあって、私もそれを知って、校長時代に松浦高校で松ナビというのを始めたんですけど、これは市役所とタイアップして課題研究させたんですけども、文科省もようやくそれに気付いて、五、六年前に、さっき言った課題研究を学校の教育課程の中に入れて、要は教室で学ぶだけじゃなくて、今からの世の中ではそういう課題研究をすることで、子どもたちが教室の中では学べないいろんな企画力であるとか、交渉力であったり、いろんな力を身につけるということで、それがひいては社会に出ても役立つんじゃないかなということで、国のほうもやっぱりそういうこれから求められる力に対して、入試もそうなんですけども、少しずつ今変化が出てきてますね。

すみません、答えになったような、なっていないような気がしますけど。

あのですね、このコンソーシアムでどういうことを取り組むかというのが、16ページに想定される提案というのが、子どもの視点から地域の視点まで挙がってるんですけど、一つ一つは非常に具体的なんですけど、全体として見ると、一体どういうことをやるのかが、全く見えないんですよ。私はやっぱり、最終的には今皆さんが言われたように、高校の魅力化、行きたい高校になるためにはどうしたらいいかということにつなげていきたいと思うんですよ。やっぱり、王道としては進路保障、進学にしても、就職にしても、先ほどの資格にしても、これはしっかり保障されてるっていうのと、先ほど言われたように部活動、子どもたちの希望の中には、これは非常に高いんですよ。この二つは王道だと思うんですよ。

でもなかなか、これはどの学校もやっていますし、難しいと思うんですよ。それで、それに代わる第3の魅力っていうのをこのコンソーシアムで、西海市内の高校に行くにあんな力がつく

よという。先ほどの堀川高校じゃないですけど、そういう力を身につけさせたいなと思うんですよ。先ほど教育委員会でもちょっと話題になって、先ほど北島委員も言われたように、昨日、私は県の産業教育振興会というところの会議に初めて行ってきたんですけども、県の教育長とか学校教育課長もいましたが、大体メンバーはこのコンソーシアムメンバーに似たような構成で、学校関係、企業関係の方が100人ぐらいいましたかね。そこで、県内の専門高校、総合学科であるとか、農業、工業、商業とか水産、こういった学科のことを話し合う会議だったんですけども、そこで高校生が、総会が終わって発表したんですよ。それを聞いたあと、私は隣にいた学校教育課長に「コンソーシアムではこれをやりたいんです」って僕は思わず言いました。

どういうことかという、例えば、諫早農業高校、ここが取り組んでいる、ここが発表したんですけども、諫早農業高校の生徒たちが、地域の農業で彼杵茶というのが有名なんですけども、この彼杵茶が、年々生産量が減ってきて担い手も不足してきていると。これを何とか助けたいと。農家のお話を聞くと、非常に品質は良くて、どこにも負けないぐらい立派なお茶なんですけど、なかなか今、お茶離れといいますか、お茶をなかなか飲まなくなったことで売れなくなって、生産もちょっと落ちてきていると。これを何とか、新しい商品をつくって売り込みたいということで、農家に行っているいろんな話を聞いたりしながら、高校生たちはこのお茶を使って、さらには長崎県の特産品の一つであるかんころ、それとカステラをイメージしてどら焼きをつくろうと。お茶を練り込んだ生地に、あんこにかんころを入れてこれをつくろうということで、試行錯誤しながら、割合を変えてみたり、いろいろ試作品をつくって市内のお菓子業者に見てもらって、そこでアドバイスをもらって、またやり直してということをやったんですね、完成したんですよ。

これが今すごく売れてるらしいんです。今はもう商業ベースに乗っているんですけども、私、この前コンソーシアムの会議で、私の夢ということで、高校生に会社つくらせて、地元の特産品を売り込むというのはどうですかねっていう話をしましたね。そのイメージにぴったりのことを、もう既に農業高校でやっているんですよ。

同じようなことが、長崎商業の商業科の子どもたちも商業で農業を助けようということで、長崎市内のゆうこうという柑橘類を使った商品を開発したり、ああいう似たようなことが西海市内で、会社まで立ち上げなくていいとは思うんですけど、3校の生徒が集まってそういう組織をつくって、企業とも連携しながら、相談を受けながら、特産品をつくるのかというの、本当に、自分がイメージしたのはこれですってさっき言いましたように、学校教育課長にも言ったんですけども、やっぱりそういう、何か新しいことをやりたいですよ。そのことで、西海市内の高校に行けばあそこのクラブに入れて、何か、先ほどアントレプレナーシップ教育であれば、起業家になりたいから西海市内の高校に行こうとかですね。そんなふうになったらいいなと。ちょっと勝手に話しましたが、昨日はこういうことを感じました。すみません。

(「どうぞ、続けてください」の声あり)

○教育委員(谷口 久美子)

私もいろいろ思い描くことがあって、以前、テレビで熊本だったかと思うんですけど、全国唯一の高校にマンガ学科っていうのがあって、とにかくマンガ学科ってつけること自体にもいろいろ自治体ではあったらしいんですけど、マンガという名前をつけたことによって、それこそ漫画家になりたい、目指したいっていう子たちが全国から集まってきて、もちろんそこには住む寮とかも整備するけど、そこはスポーツとか何とかではないけど、本当にその思いを強く持った子たちがその高校に集まってきて、地元を離れて、そして具体的には、編集の方たちが個別に付いて、コンクールとかにも出して、実際漫画家としてプロデビューするところまでずっと支援をしているっていうところがあって、これはすごいなと。部活動のいろんなスポーツもいいけど、そういう考え方もあるなっていうのが一つと、先ほど、矢吹さんがおっしゃったんですけど、例えば、バイオパークさんがあります、大島造船さんがありますというふうに、全国どこにでも発信して、西海市のここに来れば動物のことについてはもうしっかりと勉強できるよっていう、特化したそういうのがある。造船のことを学んで船を、船づくりから航海とか船については高専さんがあると思うんですけど、造船について、しっかりとここに行けば、大島造船さんのつながりもそうですけど、世界中のどこに行っても船づくりができる、そういうふうな力を付けますよというように、県内だけに目を向けるんじゃなくて、全国から高校生を呼び寄せられるような、そして親御さんからも理解が得られるような、そういう特化したものが、先ほどの農業についてもそうですけど、何か魅力っていうのを発信できていけたらいいんじゃないかなあというふうに夢を描いております。

○教育長(渡邊 久範)

今みたいな夢は何かありませんか。こういうことをやってほしいという。

○教育委員(武宮 智)

(聞き取り不能)「西彼杵バーガー」をつくって、実際にそのスーパーの松形屋さんというところで販売をさせていただいて、もう1時間以内にも完売するという、そういう好評だったんですよ。そういう子どもたちが、地元のえべす蛸というのをを使って、自分たちでつくってっていうので、非常に子どもたちも、ものすごい楽しんでやって、実際それが、物が売れるっていう喜び、その仕入れとか売上げまでは、そこはちょっと別だったのでそこまで入れればよかったなと思ったんですけど、それはすごい喜んで取り組んでいたのも、そういう発想は本当にいいなと思いました。ちょっと感想ですけど、

○教育委員(北島 淳朗)

先ほどからの話で、やはり地域から人口が減っていくという問題っていうのは、我々経営する

立場で本当に喫緊の課題で、いろんなところで集まるたびにというか、銀行さんもそうなんですけども、いろんな方たちと色々なディスカッションするんですね。先ほど出てきてるような地域活性化のための様々なことを起こすっていうのは、考えられることはいろいろあるんですけども、でも、改めて西海市の魅力って何だろうっていうふうに考えたときに、単純に人が移住してきてたくさんになって、例えば企業誘致したら一定人が増えるよとか、そういうことだけじゃなくて、本当に西海市の魅力でもって人が集まってくるとか、住み続けたいと思うとかいうことを考えたとき、なんだろうと思ったら、やっぱり土地の持つエネルギーとかパワーだと思ふんですね。それは様々なものですが、環境面、ロケーション、それから自然資源、そこに暮らしているその文化、人々とかいう、全部そこがやっぱり1番の西海市の魅力なんだろうなど。

また、それを感じて移り住んでこられてる方もたくさんいらっしゃいますから、私であればそこから何をつくっていくかってなると、ちょっと本当にさっきの話とも関連してくるんですが、やっぱり徹底した6次産業化をやるということが大事かなあと。そう思ったときに高校でいうと、6次産業学科ですよ、極端に言えば。西彼農高とか生活云々とかで、ここもいろんなクラブでいろんなことをつくってらっしゃるし、先ほどの東彼杵にも関連するんですけども、やっぱりそれをマーケティングしていくとか。何で6次産業化っていうふうに言うと、もう絶対的に付加価値をつくっていくっていうことなんですよね。いかに付加価値をつくっていくか。

だから一次産業ではなくて、そこに、本当にバリューをつけてそれをしっかりと打っていくような、世界に向けても、そういうことをやっぱりやっていくのがいちばん、高校の話でそうなったわけじゃないんで、地域としてやっていくっていう中でそういう話になっていたんですが、そういう意味では、高校からそういうものを学ぶという6次産業、学科みたいなものあってもいいなと思うし、市役所にはぜひ6次産業課をつくっていただければ、そういうふうに、これはもうずっと、ことあるたびにいろんな方と話をしている内容なんですけどね。

そこに何を原石として磨いていくのかとかいうことも含めて、極端に言えば私もちょっと関わりながら話してるのは、島丸ごと特産品工場にしていくとかいったようなことも含めてできるころだと思ふんですよ。崎戸とかいうことも含めて、ぜひそういった本当にエッジの効いたコンセプトを打ち立てていただければなと思ってます。

○教育委員(武宮 智)

先日の学校運営協議会で出た意見で、運営協議会のメンバーに高校生がいないと。だから高校生がこの学校をどうやって盛り上げていくかっていうことの発想をするメンバーに加えて、自分たちで高校をどうやって盛り上げていくかを考えさせる。ひいてはその地域をどうやって盛り上げていくかというようなところまで、高校生を入れたらどうかという意見が出たので、それは少し大事な視点だなと思って聞きました。

○教育長(渡邊 久範)

高校生の視点というのはもう我々を超えていますから、やっぱりすごいなと思いますね。先ほどの産業学科の生徒たち見ると、本当みんな生き生きしてるんですよ。昔は、我々が高校生の頃は農業科とか商業科というのはちょっと、普通科に比べるとちょっと1段下と見られてた感じがあるけど、今はもう見てたら、そっちのほうが楽しいなということで人気度も非常に上がってるみたいですし、もう子どもたちが本当に、普通科の生徒よりも生き生きしていましたね。何かやっぱり、高校生の発想というのを本当に我々大人も取り入れるべきだと思うんですよ。高校生が学ぶと同時に、我々もそれを生かして、参考にできる部分がたくさんあると思うんですよ。

○政策企画課長(山下 幸一)

まず、高校生の参加につきましては、準備委員会でもちょっと検討を行いました。ただ、各学校の先生としましては、まずはちょっと1年間、大人のほうでちょっとこう考えてみたものに参加して、次の年からとかいう形のステップを踏んだ子どもたちの参加のほうがいいんじゃないかということもあって、今年度につきましては、まだ入っていないんですけども、来年度から入るような形になってくるかなというふうに思っています。

そういったところの取組をしていくわけですけども、子ども達にもこのイキイキ活性化事業っていうのを知っていただくということがまず第一になってくるかなと思いますので、一応今年度の事業としましては、来年4月1日が西海市発足 20 周年という形になります。それで2月8日の日に記念式典を開催するようにしておりますが、まずはこのイキイキ活性化の事業として、来年の 20 周年のロゴの募集を市内の高校の生徒にしたいと。そのロゴの募集に合わせてイキイキ事業というものが誕生して、これから、魅力をしていきますよっていうことの周知を兼ねてするって形で、まずはそのロゴの募集をやっていく取組ということを考えております。併せて、今年度につきましては、先ほどから言っていますように、子どもたちがまずは何があれば高校の魅力なのか、中学校のことも含めて、何か魅力化っていうところも含めてのアンケート等の調査のほうも、今年度取り組んでいくという予定にいたしております。

○教育長(渡邊 久範)

最後、そろそろ、市長さんに締めていただきましょうかね。

○市長(杉澤 泰彦)

今日、いろんなご意見を頂きました。でも、これはつまるどころですね、やはり子どもたちが、自分たちの身近なこの高校に、どれだけその魅力を持つかということに尽きると思うんですね。

先ほど言われた西彼杵バーガーですか、これはやっぱり、そういうのをつくって、それをみんなまで食べて、それが本当は大体「今日は楽しかったね」とそれで終わりなんだけども、やっぱりそれが店頭で売れる、これも大きな学びですよ、これはね。それがやっぱりこの大きな喜びにつ

ながって、それがまた大きな感動となると。その中で、やりがいと生きがい、そしてまた自分たちが通っている学校に対する誇りというのが出てくる。私たち大人がそういうところを何か手伝いできないかっていうようなところの視点に立って、この1年間いけば、来年から子どもたちがこの中に入ってきたときに、一つこうある程度のお膳立てをつくってやっていけば、かなりのびのびと今度はいろんな発想が出てくるんじゃないかなということもありますので、そういうところまでは、やっぱり大人の役目として今ややっておかなければならないのかなという感じはいたしました。

今日、イキイキ活性化事業、これについて皆様方にご紹介したわけでありますけども、こういう中でこの1年間をどうやって、一番やらなければならぬところを引き出していけるかというところが本当の勝負になろうと思いますので、今日皆様方からいろんなご意見頂きました。本当に役に立つと思いますので、次回の今度イキイキ活性化事業の協議会の中で、いろんな提案をしていければというふうに思っております。

本当、たまにはこういう夢がある議題を話し合いたいなということは思っております。

本今日は、長時間に亘りましたけれども、皆様方のいろんなご意見を聞いて、本当に私もうれしく思っております。

また次回の開催に向けて何を議題にするかということも含めまして、次回の総合教育会議、これどういうこの議題にするかということも含めまして、これから楽しみにしているところでございますので、今日は本当に皆様方、長い間お疲れさまでした。

○総務課長(岸下 輝信)

それでは、進行のほうを事務局のほうにお戻し頂きたいと思っております。繰り返しになりますが、本日は長時間に亘り熱心なご議論を頂きまして、誠にありがとうございました。

それでは、レジュメの2番の「その他」のほうに移りたいと思っておりますが、事務連絡等をお願いしたいというふうに存じます。

まず、次回の会議の予定でございますが、10月の定例教育委員会の開催に合わせて、10月29日で日程のほうを組ませていただきたいというふうに思いますが、よろしいでしょうか。

(「はい」という声あり)

ありがとうございます。それでは次回の会議につきましては、10月29日火曜日、午後15時からというふうに設定したいと思っておりますので、その旨で予定のほうをお願いしたいというふうに存じます。

続いて、第2回会議の議題についてですが、今回は地域連携イキイキ活性化事業についてということで協議を頂きました。委員の皆様から、次回の議題について何かございましたら、御意

見頂戴したいと思いますが、何かございませんでしょうか。

一旦帰られまして、思いつき等ございましたら、事務局、総務課もしくは教育委員会事務局のほうにご連絡頂ければ検討したいと思いますので、よろしくお願ひしたいというふうに思います。

それではこれもちまして、本日の日程を全て終了したいと存じます。長時間に亘りまして御議論頂きありがとうございました。

また次回よろしくお願ひいたします。

お疲れさまでございました。

閉会 午後4時33分